

眞の復興のために



先般、福島県の会津

地方を周ってきた友人が、喜多方のラーメン屋街は閑古鳥が鳴いていた、としみじみ語っていた。いっとき「八重の桜」で観光客が増加したものの、その効

果も薄れて、人口比日本一といわれる3・7万人の町に120軒あるラーメン屋が完全に過剰状態にあるという。農産物についても風評被害にさらされ、販売は思わしくない。放射能レベルは低いとはいえ、福島県というだけでなかなか売れない。会津地方ですらこうした現状であり、県内の他産地、特に浜通

りの事態がいかに深刻であるかは察するに余りある。また雑誌が何かのインタビュー記事で、復興がなかなかすすまない中、何故復興を急ぐのかとの質問に対して、大津波被災者が

「例えば東南海地震のような大災害が発生すれば、もう3・11は忘れられる。多くの復興支援が得られるのは次の大災害が発生するまで。その大災害は明日起こってもおかしくない

さ中、筆者の小学校時代の恩師の奥様から『閑上(ゆりあげ)津波に消えた町のむかし暮らし』なる冊子が届いた。A4判、二段組みで135頁に及ぶ大冊である。奥様はみや

が、「あの日、突然、予想もできない状態で閑上の町は消えてしまひ人口五千人余の町から七百五十人もの尊い生命が奪われてしまひ

た。津波に消えた町のむかしの暮らし」が生きたときと丹念に綴られ、かけがえのない貴重な記録となっていた。そのあとがきは「復興」という営みは、なにか新しいものを生み出していくことではなく、遠い先祖の昔から脈々として続いてきた、人々の暮らしと、生きる強い力を、限りなく再発見していくことではないのか。そこからこそ、本当の『復興』がはじまるのではないかと結ばれている。

これまで衣食住にかかる緊急的な支援とともに、農地の集積や規模拡大、施設の高度化等が推進されてきたが、一方でこうした暮らしという目線をもってその地域の歴史・文化等を「再発見」しながら生かしていくという視点はまったく言っていないほどに欠落していた。支援から復興へのステージでは欠かせない肝心なものが、ここに凝縮されているように思う。こうした視点を大事にしてこそ支援も生き、眞の復興につながるっていくのである。(農的会代表)

眞の復興のために

サイン研究所代表